

第 6 回リндаウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

所属機関・部局・職名: 大阪大学・経済学研究科・特別研究員(DC2)

氏名: 須永 美穂

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

【全体的な印象】

まず、第一に、どのノーベル賞受賞者も、これまで続けてきたものも現在進行中のものも含めて、自分(たち)の研究をとっても大切にしていることを印象付ける、生き生きとしたプレゼンテーションだった。自分(たち)の研究に、自信と誇りを持っていることを感じた。

次に、どの受賞者も、様々なかたちで、“これからの経済学”(その前途)を思案しているように思った。どの講演も、経済学という学問、或いは自身の研究スタイルにおいて、受賞者が大切に思っていることを若い人たちに、伝えようとしているようであった。さらに、その思案のかたちや伝えたいことに、受賞者の専門分野の持ち味が出ているように感じた。15人の講演(基軸としているもの)は、大まかに次の5つに分けることができるように思う:(1)抽象的な理論とその発展 (McFadden 教授、Aumann 教授等); (2)社会の諸問題(年金、選挙、環境、ロボットと労働市場など)と政府について(Diamond 教授、Myerson 教授等); (3)マクロ経済学と(金融)政策(Prescott 教授、Sims 教授等); (4)銀行や企業行動(企業の社会的責任、社会的評判、金融危機に関して)について(Hart 教授等); (5)モデルの発展(特に専門的な内容)(Heckman 教授、Scholes 教授)。このように、分析手法や内容が多岐にわたる受賞者15人もの講演を一度に聞くということは、とても貴重だったと思う。この会議の講演で感じたことを、心にとどめて、日々の研究に向かいたい。(長生きできて、年を重ねたあとに、わずかでも自信を私も持つことができたら、きっとこの経験を活かしているのだと思う。)

【特に印象に残ったノーベル賞受賞者の講演を聞いて(上記(1)、(3)、(4)からそれぞれ一人ずつ、計3名)】

【(1) Robert J. Aumann 教授】

Aumann 教授はゲーム理論に関する貢献で著名である研究者であり、さらに講演内容は個人のインセンティブ付けに関するものであるものの、専門分野を問わず、多くの参加者の興味を惹こうとしたものを感じられた。講演の鍵となる言葉は、Consciousness であり、それと sense の違いを強調し、人間と人間でないもの(機械等)との対比を説き、そして Consciousnessこそが動機づけをもたらすのだと結論付けた。具体例などを面白おかしくプレゼンテーションする一方で、心理学のような、或いは、David Hume や Adam Smith の古書を想起させるものだった。経済学という学問を伝えていく、又は残していくという立場から、human nature への関心を惹き、延いては、聴衆に対しての、経済学そのものやその原点を見つめなおしてほしいという思いを感じた。人間の意識への好奇心や、それらに向かうエネルギーを鼓舞していたのかもしれないと思う。鼓舞されたエネルギーを、そうした好奇心の追及、経済学の研究に、生かしていきたい。

【(3) Christopher A. Sims 教授】

講義の内容は、昨今の金融危機を基点として、中央銀行(とくに ECB)の役割・あり方について論ずるものだ

った。危機では中銀は最後の貸手として役割を担ったことを述べ、その後の財政政策との関連、そして中銀 (ECB) が量的緩和政策をせず (ECB と独立したなんらかの他機関が行って)、金利政策によって、物価安定という政策目的を達成することに集中できればという Sims 教授の理想をもって括られた。

(3)に分類した受賞者の講演のスタイルとして、政策や GDP などのデータを振り返って、(マクロ)経済学の理論とそれの与える答えが、政策当局に重要な示唆を与えることの再認識と、現実における政策実行の困難さ (Kydland 教授は、自身の研究にもある、時間の非整合性の問題とも関係させながら) を伝えようとしている姿が印象に残った。聴衆の中には、中銀を含めた政策当局に属する (或いは志望している) 若手研究者も多くいることも考慮されているようにも思った。私にとっても、政策の変遷や対立に示唆を与えることができるマクロ経済学の役割の重要性を、再認識する良い機会となった。

#### 【(4) Oliver D. Hart 教授】

講演の内容は、企業が何を追求すべきか、目的とすべきかを契約理論モデルの中で、問うものであった。彼らの最新の研究の一つである。研究動機は、企業の目的と、個人や政府の目的を明確に分離すべきである (企業は利潤を追求し、株主の利益追求以上の社会的な責任 (倫理的な問題) は持ちえない) という M.Friedman の議論に、疑問を投げかけることにある。彼らの研究の答えは、利潤追求企業と、(金銭的に株主に害を与える) 汚染などを生み出しうる企業が、分離されているとき、または、政府がその外部性を法律等で完全に内部化できるときのみ、Friedman の主張は成立するというものだった。これらの条件が成立しなければ、企業は株主の厚生最大化のみを目的とし、市場価値を最大化することを目的としないのである。モデルとその結果が明快であることと、この研究を応用するという (汎用性の) 観点から、興味深かった。たくさん聞きたいことが出てきたので、講義のあとの休憩時間に、講義内容に関する質問を持っていったところ、モデルの細部 (条件式等) に関しても、丁寧に書きながら教えてくださった。また、その時と後日の、モデルの拡張や今後私が取り組もうとしていること (長期的な視野かつ広義に) に関する意見交換は、ほんの数分だったが、楽しかった。ここで教えて頂いたことや展望は、研究に生かし、かたちになるように努めたい。Hart 教授のみならず、Holmström 教授、Tirole 教授などは、進行中の研究を報告する中で、特に彼らのパネルディスカッションで、彼らが培ってきた理論 (契約理論等) のこれまでの発展を緻密にそれぞれに生き活きと講じていたと思う。これまでの研究の流れを伝えて、活かしていくこと、そして今後の理論の発展への切望を感じた。また、共同研究を行った J.Moore 教授への Hart 教授による敬意と配慮が印象的だった。

## 2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流 (食事、休憩時間やエクスカージョン等での交流) の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名 (3 名程度) を挙げ、記載してください。]

#### 【全体的な印象】

ノーベル賞受賞者はみな、各国から来た様々な参加者に興味を抱き、交流したいという積極的な気持ちをもって、この会議に参加していたことが印象的だった。受賞者との交流イベント (ディナーが2日、ほぼ毎日のランチ休憩、エクスカージョン (マイナウ島までの船旅及び島でのピクニック)) に加え、各日1時間ほどの休憩時間が数回設けられており、参加者が多くても受賞者と交流する機会が多く設けられていた。受賞者も、主催しているリンダウ会議評議会も、参加者みなにとって良い会にしようという気持ちを感じた。

【特に印象に残ったノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流に関して】

【Finn E. Kydland 教授】

ドルニエ博物館でのディナー(イベント)で、Kydland 教授と同席した。同席したにも関わらず、10人くらいのテーブルだったので、端から2番目にいた私やその近くの着席者は、Kydland 教授となかなか話せなかった(同席した若手研究者とお話でき、とても楽しかったのではあるが…)。しかし、私たちよりも Kydland 教授が気にかけてくださり、食事会の後半、ワイングラスを片手に、自ら席を立て、私たちのもとへ話にきてくださった。そのとき、自分がほっとした気持ちになったことが印象に残っている。楽しい話をしてくださったことも勿論うれしかったが、立場や役割を認識しながら、そこに心遣いがあったことも嬉しかったのかもしれない。Kydland 教授のその姿は周囲にもきっと印象的で、それを機に、近くのテーブルの他の受賞者たちが、より一層積極的に、同席している若手研究者と交流しているように思われた。

また、Kydland 教授を介して、少し近い(少なくとも動学マクロ経済学に取り組む)若手研究者数名と出会えたことは、貴重な経験で、大事にして、今後生かしていかないといけないと思う。

【Bengt R. Holmström 教授】

Holmström 教授とは、会食で一緒になることはなかったが、休憩時間に、少し時間に余裕をもって話す機会を持つことができた。リンダウ会議での Holmström 教授の報告が終わっていたにも関わらず、私は彼の他の80、90年代の論文について聞いてしまったので、失敗したかなと思ったけれど、自分の論文に強い関心をもってくれたのかと一瞬とても嬉しそうなお顔を見たことが印象深い。また、質問に対する回答が、板書をしているわけではないのに、まるで明快な証明を見て聞いているかのような感じも印象深い(証明に関する質問だったことも影響しているが)。また、ただ単に私の質問に答えていくのではなく、「なぜその質問に至ったのか?」「では、〇〇の〇〇についてはどう思うか?」と投げ返されていくスタイルだった。とても刺激があり、議論も深くなる一方で、私の小さな(少しは詰まっていると信じたい)脳の経験と必死に協力しなければならなかった。アメリカ等の大学に行ったことがないのでわからないが、こうした自由(厳しいが)に対応してもらう時間があるとは、あまり期待していなかったもので、こうした機会があることはリンダウ会議ならではの感じだ。質問をした論文から、Holmström 教授の経験と今考えることを教えて頂いた。その経験、その時感じたことが、今後の私の研究と、潮流をつかもうとする、またはその流れがどこに向かっていて、それでよいのかを判断する“目”になればいいと思う。それができるように努めることで、今後の研究活動に生かしたい。

【Christopher A. Sims 教授】

Sims 教授とも、会食で一緒になることはなかったが、休憩時間に、少し時間に余裕をもって話す機会を持つことができた。日本人だと伝えるとすぐに、聞きたいことを察してくださった。そして、勿論、昨今議論されている、Sims 教授の FTPL (Fiscal Theory of Price Level) と日本での講演内容(日本政府が話している)ことについて話を伺った。その休憩時間の直後の講演と、翌日のパネルディスカッションでは、もともとの予定だったのかはわからないが、日本経済について少し触れていた。パネルディスカッションでは、Prescott 教授も素直に Sims 教授に対して意見を述べていた。その日以降、日本の食事、文化や学術機関やキャリアの話だけでなく、いろいろな参加者から、日本の経済と政府の話について尋ねられた。もし何か意図があったにせよ、そうでないにせよ、多くの参加者から見たら、遠い端にある、日本の経済や政府について、興味をもってもらう契機となったことは、印象的であった。今後は、事実も意見も、もっと自国のことを自信をもって、話して、しっかり伝えることができるようになりたいと強く思う良い機会になった。

**3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。**

リンダウ会議期間のほぼすべて(上述した受賞者との交流と、日本人のみで交流できたわずかな時間を除いて)が、諸外国の参加者とのディスカッションだった。そして、その交流のほとんどは、他分野の研究を行っている参加者とであり、視点が異なるので、大変刺激的だった。一方、同じ分野、マクロ経済学の研究を行っているが、視点が異なる研究者と議論できたことも、非常に良い経験だったと思う。同じ分野の参加者たちとは、Boat Trip の間に、ほのぼのとした空間の中で、ゆっくりと話すことができた。一つ学んだ(再確認した)ことは、まず、相手の研究に関心をもって、その姿勢を示すことは大事だということだ。積み重ねてきた研究に関心をもってもらう、もっと良い時には、共感することは、喜びになる。その喜びは、また次へと、次の研究なり、出会いなりへとつなげてくれる。彼らとの交流を、まず、今後保って促進させていくことで、自身の今後の研究活動に生かしたい。

**4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。**

JSPS からの支援での参加者が私を含め4人、他機関からの支援での参加者が1人いた。そのうち1人は、同じ研究室の先輩、もう1人は研究会で一度会ったことがある方、そして、あと2人は初対面だったが、食事やお酒とともに、すぐに打ち解けることができた。同世代であることも大きいかもしれない。ほとんどが、研究分野が異なっていたこともあってか、経済学、その研究への考え方や視野が、それぞれ異なっているように感じた。しかし、それが、おもしろく、また学ぶこともたくさんあった。この会議がなければ、一堂に会することはなかったように思う。その点からも、今後もこの交流を大事に続けて、異なる視野や人のネットワークを、自身の研究活動に生かしたい。

**5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。**

(1) Get-Together (ノーベル賞受賞者を囲んでの会食を含む(今年はドルニエミュージアムにて)):

**【理由】**

- ・ノーベル賞受賞者や他参加者との交流が持ちやすい(席に着くまでの待ち時間、博物館までのバスでの移動時間も含めて)。
- ・自分たちで、どのテーブルに着席するか(特にどの受賞者のもとに行くか)を選ぶので、研究や関心の近い参加者と自ずと出会えること。

(2) Science Breakfast (Hosted by Mckinsey & Company Inc.):

**【理由】**

グローバルに展開する大手企業(私が参加したのは、マッキンゼーアンドカンパニー)のトップの人たちが、採用しようとする立場で、Ph.D 取得者(及び取得見込み)の若手研究者に向かって、プレゼンテーションをする姿を初めて目にし、自分の知らない社会、国際社会の大事な仕組みの一部を学ぶことができたから。

(3) Boat Trip:

## 【理由】

最終日ということもあったが、船の中とマイナウ島でリラックスして、互いの研究の話などをできたので。また、パーティーのような要素もあり、ノーベル賞受賞者も色々な輪の中に入ってお話をしていた様子だったので、いろんな人が多種多様に楽しむことができるプログラムだと思うので。

## 6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕

・各受賞者のプレゼンテーションを、アカデミックの世界で生きようとしている人も、中銀や民間企業で生きようとしている人たちも、みんな楽しく聴いていて、そのように人を魅了するプレゼンテーションをできるようになりたいと思った。こうした気持ちを、今後の研究活動(特に報告)に生かしたいと思うことができたのも一つのメリットだと思う。

・各国の参加者と知り合いになれたこと。その交流の中には、自身の最近の研究についてコメントをもらう機会もあり、今後も互いの研究について意見交換しようというものもあった。こうした交流ができたのは、通常の国際学会よりも、話して交流する時間(休憩時間、食事、インフォーマルなイベント)が多い(であろう)リンダウ会議への参加を通して、得ることができた、今後の研究活動におけるメリットだと思う。

## 7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

以下の3つのことを少しずつでも続けて、上記の成果を今後日本国内に還元できればと思う。

### 1) 自身の研究を通じての還元:

・受賞者の講演や Break の間の議論や教わったことから得た知見を、自身の今後の研究に生かすこと。

### 2) 国内外の研究ネットワークの構築:

・リンダウ会議参加者とのつながり(国際的なものも国内のもの)を続けていくこと。

・研究ネットワークを国内外問わず、分野を問わず、より広げていくこと。

・ゆくゆくは、共に研究をする、お互いの国の学会・研究会等で招待しあう等、海外との研究交流を自ら、促進させることができればと思う。(そのように努めたい。)

### 3) 若い世代への継承:

・事業促進への貢献;この会議の認知や、この会議を含め、若手研究者のための事業促進に協力すること(例えば、このリンダウ会議に参加した経験・感想を周囲に伝えることなど)。

・教育活動(将来的に)を通して;いつか教員という立場に立ったら、リンダウ会議での経験を伝えたいと思う。特に、私が参加したマッキンゼーアンドカンパニーの Scientific Breakfast の経験(設問 5 にて前述)を活かせるようにしたい。

## 8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

各国からの数多くの同世代の研究者、そして、ノーベル賞受賞者十数名と一度に出会うということは、貴重な機会だと思います。受賞者も含めて参加者の専門分野は多岐にわたるので、いつもと違う視点、或いは、より広い視野で、自身の研究そして経済学と向き合う良い機会になると思います。

何より、受賞者も含めて参加者はみな、各国から来た様々な参加者に興味を抱き、交流したいという積極的な気持ちをもって、この会議に参加していました。そうした空間で、なにも刺激や影響を受けない人はきっといないでしょう。寧ろ、生きていく中で、研生活の中で、糧となる経験を得るでしょう。

会議参加を希望するにあたって、色々な不安や躊躇いはあるかもしれません。しかし、リンダウの街と会議参加者の人々が作り出す空気が、それらをきつと取り払ってくれます。しかも、日本学術振興会が参加費用等を負担して下さるので、この会議参加に関しては、お金の心配は特に生じません。経済学分野は 3 年に 1 回と応募機会が少ないので、ためらわず、是非、リンダウ会議に応募してみるべきだと思います。

リンダウ・ノーベル賞受賞者会議派遣事業  
平成 29 年度 参加者アンケート

今後の事業改善の参考にいたしますので、アンケートにご協力くださるようお願いいたします。

1. 本事業をどのような経緯で知りましたか。(複数回答可)

- JSPS の HP
- JSPS のメールマガジン(JSPS Monthly)
- JSPS からのメールでの案内
- 所属機関からの案内
- 所属学会の HP、メールマガジン
- 日本人研究者からの案内(具体的に:[例]所属機関の指導教官、過去のリンダウ会議参加者等 )
- 外国人研究者からの案内
- その他(具体的に: \_\_\_\_\_ )

2. リンダウ・ノーベル賞受賞者会議に参加して、どのような影響がありましたか。(複数回答可)

- 学術的な視野が広がった。
- 通常の国際学会では得られないような助言を受けることができた。
- 国際的な場で研究活動を行いたい、という希望が強まった。
- 将来、大学や学会等でリーダーとして活躍したい、という希望が強まった。
- 共同研究等の持続的な研究交流のパートナーが見つかった。
- 自身を研究者として受け入れる研究室が見つかった。
- web やメールではなく、顔を合わせた議論や交流の重要性を認識した。

3. 他の日本人若手研究者にも本事業への参加を勧めたいと思いますか。

- はい
- いいえ

4. 本事業について改善すべき点や、本事業の認知度を上げるためのアイデアがあれば、具体的にご記入ください。

改善すべき点があるとすれば、日本において、リンダウ会議(本事業)の認知度がとても低いことだと思います。認知度を上げ、さらに、即した応募希望者を増やすことは、容易ではないとは思いますが、その意義は大きいと思います。認知度を上げるための方法を、思いついたままに、以下に書きます。

- 1) 分野や性格が異なる、これまでの参加者がそれぞれ感じたことを、周囲の若手研究者・学生に伝えること(私も含めて):
- 2) 中銀や政策当局に就職希望者の学生も告知対象とする等、応募者の枠を広げること: 海外(特に欧州)からの参加者は、アカデミックポスト希望の若手研究者以上に、中銀や政策当局希望の若手が多いように感じました。そうした人々に向けての、受賞者のメッセージも多く見受けられました。(海外はアカデミック以外にも Ph.D を持っているか取得見込みの人が多く、日本とは制度や慣習が異なるので、このアイデアは、今すぐ実現することは難しいかもしれません)。

ご協力ありがとうございました。